



教授の呟き

第6回

標準化と差別化の狭間で悩むとき

東京商船大学教授

苦瀬博仁

●●ワープロソフトの ●●「ワード」と「一太郎」

最近、周囲で使用しているワープロソフトはワードが標準的になっているようだが、私はいまだに一太郎を使っている。このため、一太郎の原稿をメールで送信すると、相手先がワードで読み込んだ場合に、細かい部分でミスが生じることもある。

先々月号（第4回）の図では、一部で斜線や矢印が欠けてしまい、分かりにくくて申し訳なかった。標準化できていない著者の不徳として、お許しいただきたい。

しかし、一太郎にこだわる理由も幾つかある。ワードも使えないわけではないが、細かい造作や調整を行うには、以前から慣れ親しんだ一太郎の方が使いやすいし、これまで蓄積してきたノウハウ？も無視できないのである。

●●●標準化とサービス差別化競争

ロジスティクスにおける標準化の例に、ユニット・ロード・システムがある。これは、複数の大きさの異なる商品であっても、梱包の大きさをできるだけ統一して、さらには同じ規格のパレットやコンテナを用いて、効率的な物流を実現しようとするものである。そして現在も、標準化への努力が続けられている。

複数企業間で、同一規格の容器を共同利用することも考えられた。こ

の成功例には、ビール瓶がある。各社のビールは同じ規格の瓶に詰められており、他社の瓶でも使用できるため、回収するビール瓶の物流の錯綜（さくそう）が避けられている。

一方で、容器の規格化が困難な例には、化粧品がある。「わが社の商品を並べてみると、1ミリ単位で高さが違う」とは、化粧品会社の方の嘆きである。

銘柄を区別できるラベルさえあれば同じ容器でも消費者に受け入れられるビールと、容器のデザインがマーケティング戦略となる化粧品では、事情が異なる。

また最近、コード番号を郵便番号に合わせた宅配便会社があるが、郵政公社とはライバルであっても、コード番号の共通化にメリットを感じたからであろう。

こうしてみると、容器やコード番号を統一することが市場競争の妨げにならず、かつ自社の物流効率化につながるのであれば、おのずと標準化や規格化が進むと考えられる。しかし、化粧品の容器のようにマーケティング戦略に直結しているのであれば、たとえ同一会社でも標準化や規格化は不可能なのかもしれない。

●●●国際対応への遅れ

ワープロソフトで言えば、外国との文書のやりとりは、いや応なしにワードを使わざるを得ない。なにしろワードが世界標準なのだから、国

際会議はワードでなければ論文やレポートを受け付けてもらえない。

こんなときは、一太郎の図表を作り直す手間がかかって、効率も悪い。そこで、標準化の流れに乗るための労力と標準化のメリットを天秤にかけながら、ワードに乗り換える時期をうかがっている。

これと同じように、ロジスティクスの世界でも、ISOなどの国際標準に合わせておかなければ効率が悪いし、SCMの促進やトレーサビリティの確保のためにも、EDIのメッセージや商品コードの国際的な標準化が不可欠なはずである。

●●●
●●●**標準化を進めるために**
●●●

脱系列化やグローバル化の時代を迎えて、ロジスティクスの全体最適化が必要とされている。それゆえ、標準化しなければ置いてきぼりを食ってしまうかもしれない現実も、直視しなければならない。

しかしロジスティクスでの標準化の対象が、容器であれ、コード番号であれ、情報システムであれ、各企業や取引間各社においてメリットがなければ、もしくは現状にデメリットを感じなければ、いくら業界や産

業界全体としてのメリットを強調しても標準化しにくいだろう。また短期と長期では、標準化のメリットも異なるだろう。

結局のところ、標準化と差別化のそれぞれのメリットとデメリットを、自社の背景や事情を踏まえて分析しなければならなくなる。そして将来の標準化のメリットは、現状での差別化のデメリットとの対比だけで考えるべきものではない。将来標準化したとき生じかねないデメリットを、より少なくする努力も必要だと思ふのである。



標準化・差別化のメリットとデメリット

標準化戦略		差別化戦略	
メリット ↑ ↓ デメリット	情報交換の容易さ 他社との共同化の容易さ 商品・サービスの均一化 初期投資の可能性 ノウハウ蓄積の必要性	情報交換の煩雑さ 他社との共同化の煩雑さ 商品・サービスの差別化 過去の資産の有効利用 過去のノウハウの継続性	デメリット ↑ ↓ メリット

Profile

東京商船大学 流通情報工学課程
流通管理工学講座 教授
苦瀬博仁

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。75年、同大学大学院修士課程修了。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年から東京商船大学助教授、94年より同大学教授。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授を務める。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)

